

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

発行:日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 9 号

2008年5月25日

〒162-0806

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

03-5228-3171

発行責任者: 吉谷かおる

「真ん中に立ちなさい」 マルコによる福音書第3章3節

司祭 西原廉太 (中部教区)

1998年5月の日本聖公会第51定期総会で、正式に日本における女性の司祭職への道が開かれてから、ちょうど10年を迎える。1996年の第49定期総会決議録には、私が中部教区からの資料として書いた「女性の司祭按手についての一考察」が収録されているが、そこにはこう記している。「女性の司祭按手問題で教会が分裂する、と消極的に考えるのではなく、この問題をきっかけにして、私たちの伝統の意味、サクラメントの意味、職制の意味などに光が当てられた、と積極的に捉えたい。女性が司祭に按手されることによって私たちの教会がどのように豊かに変わるのかを論じ合いたい」。その後、実際に日本聖公会は、多くの女性の司祭職の誕生という恵みを経験してきた。私たちの教会はどのように変わったのであろうか。この10年の間に与えられた果実の一つひとつ確かめてみることも大切な労作となる。

私は、アングリカン・コミュニオンのある常設委員会のメンバーに加えていただいている。現在の世界の聖公会にはさまざまな破れがあり、そのことを否定する者は誰一人としていない。しかし、その破れを痛みとしながらも、「神を愛し、互いを愛し合いなさい」という教えに徹底的に従っていこうとする苦闘が、私たちのアングリカン・コミュニオンにあることを、肌身で知ることができる。この委員会のスタッフは、アングリカン・コミュニオン事務所主事のテリー・ロビンソン。英国教会の女性の司祭である。彼女に与えられた賜物は底知れない。会議の中では女性聖職に反対している主教委員の聞くに堪えないような発言も飛び出すことがある。しかしそんな時も、テリーは正確無比に議事録をとり続ける。彼女はまた、どれほど自分が疲れていても、他者への優しさを忘れることはない。ある時、彼女に、連日深夜まで働いてくれていることへの感謝を伝えたところ、こんな言葉が返ってきた。「私は、このコミュニオンを愛しているから」。彼女のこんな思いこそが、実は私たちのアングリカン・コミュニオンを支えているのである。

彼女に一度、好きな聖書の言葉を聞いたことがある。それは、手の不自由な人にイエスがかけたこの言葉であった。「真ん中に立ちなさい」。テリーは、この世界、社会の中で隔っこにじっとしているすべての人々に、「真ん中に立ちなさい」というイエスの励ましを伝えたいのだと言う。「私自身がこの言葉にエンパワーされながら、さまざまな困難を乗り越えて、司祭職に召されてきたから。」

「真ん中に立ちなさい」。この主の励ましは、日本聖公会のすべての女性たちにも語られている。



連帯によって実現する平和

司祭 池本則子（京都教区）

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(ヨハネ 15:5)

天地創造の時、神様は「人が独りでいるのは良くない」(創世記 2:18)と男女を創造された。そして、すべての人に異なったさまざまな賜物を与えられ、助け合い、補い合って共に生きていくようにされた。だから、人間は独りで生きていくことはできない。たくさんの人たちといろいろなつながりを持って生きている。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている」(ヨハネ 15:4)と、ぶどうの木であるイエス様は私たちに呼びかけられた。枝としてイエス様につながった私たちは、イエス様にしっかりとつながられていることによって、枝同士もまたしっかりとつながり合っている。このつながり合った者同士の間、イエス様を通して神様から豊かな恵みと祝福が与えられ、主の平和のうち共に過ごすことができるのである。

「つながり合う」=「連帯」。1 昨年 の第 1 回日本聖公会女性会議において、写真絵画の展示と「連帯をめざす礼拝」をさせていただいた。その内容は、「スンニでも、シーアでもない、われわれは人間だ！」と宗教・宗派・民族を超え、非武装・非暴力で平和を実現しようとしているイラク市民グループ I F C（イラク自由会議）と、I F C に連帯している日本の活動についてだった。そして昨年 の 4 月、この連帯によって、イラクの真実と人の命の大切さを伝える世界初の市民によるメディア「I F C サナ（光）衛星テレビ局」が開局した。中東とヨーロッパの全域に放映されているが、衛星が届かない日本では、「イラク平和テレビ局 in Japan」を立ち上げ、現地で放映した映像

を送ってもらい、日本語のナレーションを入れて編集した映像を毎週約 15 分番組としてインターネットで有料配信している。イラクからだけではなく日本での活動の映像も英語版にしてイラクに送っている。今この活動は日本だけではなく、アメリカ・イギリス・フランス・フィリピン・インドネシア・韓国・イランなどの平和・反戦グループなどとも連帯している。今後、さらにこの連帯の輪は広がっていくだろう。

私がこの活動に関わっている理由。それは「神様から授かった尊い命が、なぜこんなにも簡単に奪われるのか。弱い者が一部の権力者の欲望のために、なぜ犠牲にならなければならないのか」である。この頃あまり報道されなくなっていると思うが、毎日どれだけのイラク市民、ことに女性・子どもの命が奪われていることか。占領軍であるアメリカの兵士を載せた日本の基地から飛び立つ戦闘機による攻撃。宗教の名を借りた宗派間の殺し合い。武力が、暴力が、正義の名の下に行使されている。武力・暴力にしか頼ることのできない人間の非情さ。

イエス様はこの世の社会の中で働かれている。そのイエス様の働きを実践する教会、クリスチャンもまたこの世の社会の中に存在し、働いている。今、この世界の中で何が起きているのか、私たちはもっと社会の現実を目を向けなければならないだろう。イエス様は非武装、非暴力の平和を、そして一人として必要とされない命、犠牲になる命などないことを教えられている。お互いの違いを認め合い、助けあって生きていくことを教えられている。連帯こそが平和が実現する道ではないだろうか。

第52回 国連女性の地位委員会および IAWN 会議に参加して

神学生 千松清美（大阪教区）

2008年2月25日～3月7日の期間、ニューヨーク国連本部において、第52回女性の地位委員会と、同時に開催されたACC（聖公会中央協議会）主催のIAWN（国際聖公会女性ネットワーク）の会議にACCの代表団の一員として、北海道教区木村夕子司祭と参加しました。（私たちの滞在期間は2月21日から3月3日まで）

今回ACC代表団は30カ国から125名の参加があり、この会議でNGO中では一番大きな団体となりました。

今年のテーマは「男女共同参画の推進と女性のエンパワメントのための資金調達」です。国連の本会議では、各国政府代表がなかなかなくなる男女不平等の経済的コストやジェンダー平等への投資を追求する仕組みなど、今回のテーマに沿った決議案を提議していました。

本会議最終日の国際女性の日（3月8日）に潘基文国連事務総長が語ったなか、「資源配分を定期的に監視し、報告する必要があります。国際的な支援金はもちろん、国内予算の流れを現実のニーズに合わせ、持続できるようにする必要があります。」とあります。それに対し、



前列左が筆者、右が木村夕子司祭



昨年に続き今年も日本政府代表（目黒依子さん）とNGO団体間の面談に出席し、今回のテーマに対し日本政府として国連の基準に答える事の難しさがあることを聞きましたが、日本政府のジェンダー平等への関心と姿勢が低いことを改めて知りました。

IAWNの会議では、同じテーマに沿って参加者の実際の現状や問題点を話合う時間があり、Advocacyの方法を学んだ後、グループディスカッションをし、その結果を発表して意見交換をし、各国や代表団体の状況を直に聞くことが出来、共感する部分や初めて聞く状況に驚くこともありました。その中で特に強調されていたことは、ACC決議13:31に対する現状とこれからの方向についてでした。参加者全員が各々の教区、教会や団体に帰って本当に身近な人びとに女性の権限の必要性を話すことが大切だと話されました。また、今年7月に行われるランベス会議に出席する主教へ「女性リーダーの教育」と「女性主教へのサポート」を、母国に帰り私たち自身が訴えてほしいと言われました。私は日本よりも欧米のほうが女性の教会での権限や進出は多いと思っていましたが、教会で責任ある立場や働きをするのがほとんど男性だと不満を漏らしているのを聞き、どの国も変わらない

現状だからこそ、この会議がとても重要なのだと知りました。

この滞在期間中、英語力と知識の不足から多くの会議内容が理解出来ず、グループディスカッションで発言を求められ、何を話せば良いかわからず大変苦労しました。そして、そのことでストレスを感じていましたが、この心の不安から解放してくれた人がいました。それは、主催の IAWN が勧めた NY 在住の参加者と海外からの参加者を結ぶ「ネット・パートナー」です。会議初日の受付で、パートナーの名前とメールアドレスが書かれたカードを受け取り、この会議期間中にそのパートナーを探してパートナーシップを持つということでした。私のパートナーは、ナイジェリア出身の年配の方でした。会議3日目に彼女を見つけ、会うなり抱きしめてキスをされ、お互いの自己紹介をし終わると、その場で「私の日本の友達よ～」と周りの人たちにうれしそうに紹介してくれるとても愛情豊かなお母さ

んのような方でした。この優しい母のような方は、‘嘆き悲しむ女性のための祈りのグループ’に所属し、毎朝・夕決まった時間帯に多くの女性のために祈りをささげる奉仕をしています。彼女が「祈りには力があって、この祈りは神に聞かれ、必ず実現してくださる。私は、あなたのことをこれから祈っていくから。」と言ってくれました。この言葉に私はリラックスでき、NY 滞在中だけでなく日本に帰り4月から神学校で新しい歩みをするための励みになりました。

今回の会議出席は、知識に乏しい私には大変もったいないくらい貴重な経験でした。恐らく持ち帰らなければならない重要な情報は少ないと思いますが、受けてきたたくさんの恵みは、これからも周りの方々に分かち合えると思います。この大切な機会を与えてくださった神さまと大阪教区婦人会、女性デスクの皆さまに感謝いたします。

国連女性の地位委員会って？

1946年6月に国連経済社会理事会（経社理）の機能委員会のひとつとして設置されました。政治・市民・社会・教育分野等における女性の地位向上に関し、経社理に勧告・報告・提案等を行うこととなっており、経社理はこれを受けて、総会に対して勧告を行います。年次会合は、現在はニューヨークの国連本部において、毎年2～3月頃に2週間の期間で開催されています。

2008年の会議では、日本も含む各国代表や国連機関、NGO代表等によるステートメントの発表、「ジェンダー平等及び女性のエンパワメントのための資金調達」をテーマとしたハイレベル円卓会合、対話型専門家パネルや、「紛争予防・管理・紛争解決及び紛争後の平和構築への女性の平等参画」（第48回国連婦人の地位委員会合意結論）の実施進捗状況の評価に関する対話型専門家パネル討議、合意結論、決議等についての討議等が行われ、以下の決議及び合意結論が採択されました。

決議

ア)「女性及び児童の人質」、イ)「女性性器切除（FGM）の撲滅」、ウ)「パレスチナ女性の状況及びその支援」、エ)「国際婦人調査訓練研修所（INSTRAW）の強化」、オ)「女性、女児とHIV/AIDS」合意結論 ジェンダー平等及び女性のエンパワメントのための資金調達

IAWNって？

IAWN = International Anglican Women's Network の略称。国際聖公会女性ネットワーク。1996年11月に聖公会中央協議会（ACC）により開催された審議会の結果組織されたもので、マザーズユニオンとアメリカ合衆国米聖公会の女性たちによる感謝箱献金連合の資金提供により設立されました。

ACC決議13:31って？

第13回全聖公会中央協議会決議第31号。「聖公会中央協議会（ACC）は第49回国連女性の地位委員会（UNCSW）へのACC所管区からの代表団からの報告を受け、承認する。そして国際聖公会女性ネットワーク（IAWN）が北京行動綱領とミレニアム開発目標に回答して活動してきたこと、またそれらの活動が神の創造の十全な開花に向けて進んでいくものであることを確認する。すべての段階における意思決定において平等な参加を求めているミレニアム開発目標を承認し、以下の点を要請する。」とし、常置委員会、加盟諸教会、各管区に対して5項目の要請を記しています。その一つに、各管区に女性問題担当者の設置することが明記されており、日本聖公会もこれに基づき、女性デスクを置きました。また国連女性地位委員会へ各管区から女性を派遣することも盛り込まれています。

第16回

聖公会女性フォーラム のご案内

アグネス北川規美子
(神戸教区)

「わたしたちに必要な糧を今日も与えてください」(マタイ6:11)

沖縄の女性フォーラムから継続するもの

昨年の沖縄の女性フォーラムに参加された方は、沖縄の青い空や海とともに会場の雰囲気を感じておられることと思います。それまでのフォーラムとはちょっと異なって、沖縄ディの様に沖縄を味わい、沖縄の女たちが日常生活で直面している問題を話題とし、2泊3日を過ごしたことはとても有意義でした。それまでは、開催地の状況でさまざまな色合いを加えながらも、女性の司祭按手について、また司祭として働いている現実について、また、教会で司祭として女性が働くことについて、継続して取り上げてきましたが、さらに、沖縄の現実から女性の課題をとらえることのできる体験となりました。(『タリタ・クム』第7号に報告)

沖縄でのフォーラム最終日、2008年にフォーラムを開催したいということだけは参加者のほぼ全員の希望でしたが、テーマも担当者も未確認のままの散会でした。

そんな中、2008年は関西のメンバーの担当により、「食」をテーマに第16回聖公会女性フォーラムを開催することになりました。といっても、これまでのフォーラムで継続して取り上げてきた女性司祭をめぐる課題が解決された訳ではありません。例えば女性が司祭として働くこと、意志決定機関の女性の割合、セクシュアリティに関わることなど問題は山積しています。しかし、私自身

が沖縄で再確認できたことは、フォーラムは、日頃働きと場所を異にしている私たちが再会して、元気を充電し、派遣される場だということでした。教区や地域によって直面している問題はあまりにも異なります。そして時間を要します。しかしフォーラムで出会うことはそれらの問題と無関係ではありません。それぞれが個人で、また教区で、教会で直面している課題を抱えながら、人と人が出会うことは力となります。

「食」をテーマにした今回のフォーラム

「私たちに必要な糧を今日も与えてください」これは“主の祈り”の真ん中にある祈りの言葉です。まさに私たちの信仰の中心にあるものです。そして日常生活そのものであり、地球人として、日本人としての自分を考えさせられるものでもあります。

食卓を囲んでいる時間を失いがちの日々から、ちょっと時間をスライドして、心を留めて食卓を共にできたらと思います。

女性フォーラムなんて初めて耳にした方も、どうぞお気軽にご参加ください。そして久しぶりの方も、是非ご参加ください。

日時 2008年7月20日(日)午後4時受付
~21日(月・祝)午後3時解散
会場 京都教区センター、
宿泊 ザ・パレスサイドホテル
参加費 10,000円(宿泊費、食費、諸費、遠方の
方交通費補助)
部分参加2,000円+食費実費
申込方法 名前、住所、TEL、FAX、所属教会、宿泊
の有無、食事(7/20夕食、7/21朝食・
昼食)の有無を明記の上、郵送または
FAXでお申し込みください。
申込締切 6月末日
申込先・問い合わせ先
加藤正恵・飯田典子

ジェンダープロジェクトから

美しい若葉の季節も終わりとなり、いよいよ梅雨の季節に入ります。みなさまいかがお過ごしでしょうか。ミャンマーではサイクロン、中国では大地震による未曾有の災害が起き、被害にあわれた方々の回復を心から祈る日々ですが、このような災害の時にあって、痛切に感じることは「人を大切にする」という人権意識の重要性です。日本国内で流れるニュースでも、命を奪われたり、さまざまな暴力によって、人権を侵害されることの多さに目を覆いたくなります。特に女性や子どもが被害をうけることが多いのも特徴的ではないでしょうか。なぜ、女性や子どもが被害を受けやすいのでしょうか？ジェンダーの課題は、単に性別役割や目に見える性差別だけでなく、時には命にかかわる問題を孕んでいます。それは一部の関心ある人たちが考えればよいものではなく、性別に関係なく、すべての人の日々の生活に密着していることがらであることをこれからも伝えていかなければならないという思いを強くもっている昨今です。

さて、ジェンダープロジェクトは第56総会期の任期を終え、新たに第57総会期の任期に入ります。そこで、これまでの歩みを振り返りつつ、皆さんとご一緒に課題を確かめたいと思います。

2002年に発足したジェンダープロジェクトは、発足当時の目標であった第1回日本聖公会女性会議開催によって、期目の任務を達成。その後、メンバーを一部交代して2007年より期目として出発しました。期目は、女性会議での呼びかけ文に示された15項目の課題の中の「日本聖公会全教区において女性の司祭職の正当性が保持され、男性の聖職と同等に尊重されるよう働きかける」「聖書の中の女性の物語を掘り起こし、新しい声や多彩なメッセージに出会っていく」という二点と、期目には取り組むことのできなかった「セクシュアル・ハラスメント防止にむけて」

を重点課題として問題を検証しつつ、これまで継続としてきたジェンダー課題の啓発、共有、ネットワークづくりのための活動をすすめてきました。女性会議の開催とこれまでの啓発活動によって少しずつジェンダー課題への気づきは広がっているものの、私たちの生活や文化の中に深く入り込んでいる問題性は、課題として依然として認識されにくい状況です。しかし、プロジェクトの機関誌『タリタ・クム』発送先が300部を超え、第1号発行時の倍近い読者を得ていることは大きな希望です。このネットワークを通して、新たな気づきや人材の発掘へとつなげていけるよう働きかけていきたいと思えます。また、このプロジェクトの働きが、エキキュメニカルな女性たちに勇気と励ましを与えていることも皆さんと共有したい点です。

生活と文化に深く根付いているジェンダー課題の克服には、一人ひとりの主体的な気づきが大変重要です。「固定された性別役割を超えて自らの力に気づく機会を与えられること」に向けての地道な努力が今後必要であり、一人ひとりの主体的な気づきによって、個人や共同体がエンパワメント(本来もっている力をとりもどす)されていくことをこれからも目指したいと思えます。教会の働きにおける女性と男性の平等な参与は、正義と平和の実現のために欠くことのできないものです。すべての人が尊重される社会の実現のために、より一層女性デスクや人権担当者、各教区と連携を深めていくことが不可欠であると考えています。

第57総会期は、懸案の「セクシュアル・ハラスメントについてのアンケート実施と報告」を今総会期前半の課題とし、また、女性デスクと協働でのジェンダー課題に関わる啓発活動を引き続き行っていきたいと思えます。

(大岡左代子)

女性デスクから



管区に女性デスクが設置されてちょうど2年（1総会期）が経ちました。新たな2年間に向けて女性デスクが考えている課題をお伝えし、共有していただけたらと思います。

この2年間…例えば、こんなことに取り組みました

ハラスメント防止モデル案を作成 (07.3)

第56（定期）総会での決議「セクシュアル・ハラスメント防止機関ならびに相談窓口設置のためのモデルを策定する件」（第21号）にしたがって『教会におけるハラスメントを防止するために～各教区におけるハラスメント防止機関ならびに相談窓口設置に向けて』を作成。

ハラスメント防止や女性の人権について考える学習会やワークショップを開催

ジェンダープロジェクトと共催し「ハラスメントを考えるワークショップ」を企画、開催したり、学習会のコーディネートなどを行ったりしました。

国際的なネットワークに参加 IAWN（国際聖公会女性ネットワーク）メーリングリストに参加し、世界の聖公会女性たちとそれぞれの取り組みについての情報交換を行い、また国連女性の地位委員会（第51回、52回）・IAWN（国際聖公会女性ネットワーク）会議へ参加者を派遣しました。

次の2年間に向けて

意思決定機関に女性を！

総会をはじめ日本聖公会のさまざまな

レベルでの意思決定機関で、女性の参加割合が低いままです。女性が団体として

の意思を決める場に居合わせることで確実に変えていける何かがあると思います。まずは、その「何か」を一緒に考えることから始めませんか。

ハラスメント防止に向けて

どんなに仕組みを整えても、一人ひとりの意識が変わらなければ人権侵害は起こるものだと思います。これまで同様ジェンダープロジェクトなどと協働してハラスメント防止の教材づくりやそれを用いた実際の学びの機会を広げていきたいと思っています。

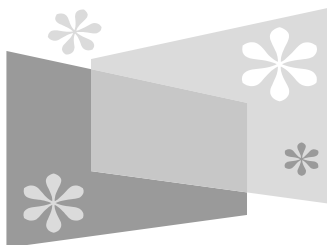
女性たちのネットワークづくり

日本聖公会にはいくつかの団体やグループがあり、さまざまな取り組みをしています。互いの取り組みについて関心を共有し、それぞれの課題に連帯、協働につなげていくことで実現できることもあるのではないのでしょうか。

女性の司祭按手 10年

今年、女性の司祭が按手されて10年を迎えます。12月には記念プログラム（感謝礼拝、研修など）を行い、これからの女性の教役者を育てていく環境づくりについて互いに考える機会にしたいと思っています。（12月4-5日頃あるいはその前後を予定）

（木川田道子）



シリーズ「聖書の中の女性たち」

ミカル サムエル記上 18 章 - 下 6 章

主教 高地 敬(京都教区)

ミカルは、聖書の中では珍しく何ページにも渡って登場する女性の一人です。イスラエル初代の王サウルの娘でありました。父親は家臣の一人であるダビデを妬み憎んでいたため、ダビデを彼女の姉(妹?)と結婚させて、その結納金の代わりに敵を 100 人討ち取れとダビデに命じ、彼が戦闘で死ぬようにしようとしますが、どうゆう訳か姉は他の男と結婚します。ミカルはダビデを愛していたので父親はこれを好都合と思い、ミカルとの結婚をダビデに持ちかけます。ダビデは戦闘で死ぬどころか 200 人の敵を討ち取り、ミカルと結婚します。その後もダビデはサウル王に命を狙われたため、ミカルは夫であるダビデを窓からつり降ろして逃がします。何故そのようなことをするのかと父に問われて、ミカルはダビデに逃がせと脅されたのだと答えます。その後、ミカルは父親によってパルティという男に与えられたとのこと。

以上、サムエル記上 18 章、19 章を読んだだけでも、父親とダビデの確執の狭間に置かれて翻弄されている女性の姿が目に見えます。好きな男性と結婚するけれども、父親はその男性を殺そうとしているというとき、ミカルの思いは私たちの想像をはるかに超えているように思います。毎日答の出ない苦悶にさいなまれ、それから解放されることがない。夫を逃がしてそのために離別する。そして好きでもない男性と再婚する。

ダビデとサウルの確執は続き、サウルの死後実権を握った司令官アブネルはダビデ側に寝返って、ミカルをパルティから取り上げてダビデのもとに土産として

連れて行きます。

「パルティエル(パルティ)は泣きながらミカルを追い、ベフリムまで来たが、アブネルに『もう帰れ』と言われて帰って行った。(サムエル記下 3 : 16)」

聖書にはなぜこのような悲惨なことが延々と綴られているのでしょうか。読んでいるだけでとてもしんどいのです。現実の世界を忠実に映し出して、だからこそ与えられる神様のお恵みを描こうとしているということは分かっているつもりなのですが。

王となったダビデは神の箱をエルサレムに運び上げることができて、裸同然で喜び踊り、民衆も喜びますが、それを見たミカルは夫ダビデを蔑みます。

『今日のイスラエルの王は御立派でした。家臣のはしためたちの前で、裸になられたのですから。』『お前の父やその家のだれでもなく、この私を選んで、主の民イスラエルの指導者として立ててくださった主の御前でわたしは踊ったのだ。私はもっと卑しめられ、自分の目にも低いものとなろう。しかし、お前の言うはしためたちからは、敬われるだろう。』(サムエル記下 6 : 20-22)」

ミカルは自分の思いを素直に口に出してみただけだったのかもしれませんが、ダビデが妻ミカルの思いを受け止めることはありませんでした。伝統的な見方からすれば夫の行動を云々して、妻としてあってはならない言動をしたと捉えられるでしょうし、神の箱を迎えるという慶事に水を差す冒瀆的な態度と捉えられるでしょう。互いの気持ちを出し合って理解を深め合おうという、夫婦の基本的な

あり方には程遠い見方です。ただ、これはダビデの頃の世界のことだと言うより、今の私たちの世界もこの時代と全く何も変わっていないのではないではないかと思えます。

ミカルが夫を「蔑んだ」結果は次の通りです。

「サウルの娘ミカルは子を持つことのないまま死の日を迎えた。(サムエル記下6:23)」

ここでは、神さまが選ばれた歴史の「中心」である夫ダビデを蔑んだことに対して罰が与えられたのだと考えられていることは明らかです。しかも、子がないことが罰となっているとすると、とても悲しい気持ちになってしまいます。神様も同じようにお考えなのではないでしょうか。世の

悲惨な事柄、深刻な病気や障がいや災害や不慮の死別など、すべて神様の罰の表れなのではないでしょうか。イエス様はこのような決め付けから私たちを解放してくださいなのではないでしょうか。

本心をいうとたたかれ、主体的に生きようとしても許されない。男性が生きているその縁辺で生きているとしか思えない。繰り返しになりますが、現代でも聖書の時代と根本的に何も変わっていないのではないのでしょうか。すべてにおいて限界のあるようなこの世界に生きざるを得ない私たちへのイエス様の解放の業と促しに、心から耳を傾けたいと思えます。

BOOK REVIEW09

評者 吉谷かおる

下関崇子『曼谷シャワー』

平安工房、2007年、1200円+税

下関崇子『闘う女。そんな私のこんな生きかた』

徳間文庫、2004年、552円+税



よく「ご飯が喉を通らない」というけれど、2月に兄を亡くして、人には「活字が脳を通らない」時があることを知りました。今売れている本は、結局、上野千鶴子著『おひとりさまの老後』とその類書。リディア・フレム著『親の家を片づけながら』も平積みになっていますが、まさに片付け中の今、薦められたくありません。面白い本でも3行と続けて読めないというのに。・・・そんな私が読書リハビリ第一弾として読んだ本、『曼谷(バンコク)シャワー』を今回ご紹介したいと思います。北海道人は冬に倦む頃合いになると、南国を夢みるのです。

この本は、NHK・BS2「週刊ブックレビュー」で見てチェックしたのですが、タイでムエタイ(タイ式キックボク

シング)の選手になった日本人女性を書いたものだと聞いて、耳を疑いました。いつのまに日本の女性はそこまで豪胆になったんだ!著者はワセダを出てTV番組のリサーチャーをしていたらしいけど、何がどう転べば本場のムエタイ選手に?これは読んで確かめねばなるまい。しかも、タイの庶民(と番組中でいっていた。ムエタイのジムのトレーナー、ヨード君)と結婚して子育て中とか。現今、海外で活躍している女性はいくらでもいるし、国際結婚もすこしも珍しくはない。しかしまだまだそういう人は、環境と特別な才能(努力も才能のうち)に恵まれた成功者と思われがちなのではなからうか。そこへもってきて「ハイソ」や「セレブ」の連想ひとつさせないとは。ムエタイボ

クサーになるというのも特別な才能の賜物といえなくもないが、通常はあまり憧れないというか思いつかない道なのではないか。蛮勇タイプなのか？気になります。

『曼谷シャワー』はバンコクの日本人向け情報誌の連載をまとめたものなので、ムエタイとバンコク（庶民！）生活についての異文化ガイドブックの趣です。入手しにくいかもしれませんが、イラストや細かい注も満載で、あ～バンコクの屋台でおかずを買って食べたい、と当然思いますし、格闘技にまったく興味がなくても、知られざる世界を知る面白さを味わえます。そして一話一話は短いのですが、著者の生活の変化が透けてみえて、最終的にはひとごとと思えなくなっています。なぜこの人はタイで試合をするまでになったんだろうという前史を知りたくなるわけですが、それについては『闘う女。』のほうで読めます。といっても、日本でキックボクシングを始めたのは「やせたいから」、会社をやめて修行のためタイに渡ったのは「もてないから」とかなり肩透かし事情が淡々と書かれているのですが、20代～30代の女性の多くがぶつかる悩みが表白されていて、私は共感しました。「もてないのはふとっ

ているからだ」「やせたらもてるはずだ」この間違いとしかいいようのない思い込み、身に覚えがあります。闘うことに興味がなかったはずなのに、しだいに勝つことへの欲が出てくるのもわかる気がする。豪胆どころか常識的で、試験前には勉強しなければと焦るタイプである著者が、対戦相手すら直前まで決まらないタイの「マイペンライ（大丈夫）」に流されつつも、とにかく「生活している」ことにたくましさを感じます。蹴られ強いというべきか。特異なジャンルだけに、日本女性の可能性の極北か、と色めきたってしまいましたが、実際には、減量に苦しみ、試合に緊張し、タイの慣習に驚き、結婚を迷い...、という普通さが魅力で、サクセス・ストーリーとしては微妙なところがいいです。

元気がでたところで、もうすこし。観てから読むか、読んでから観るか、みなさんも悩んでください。原作は名作、映画化も成功の2作品です。『ノーカントリー』原作はコーマック・マッカーシー 『血と暴力の国』扶桑社文庫、2007年、857円+税。『つぐない』原作はイアン・マキューアン 『贖罪（上・下）』新潮文庫、2008年、上巻552円+税・下巻590円+税。

<p>ジェンダーのつづき</p> <p>子どもが学校から持ち帰るプリントに、「保護者のサイン」という欄。「うん？保護者欄は父親の名前？」と一瞬悩む私。すり込まれた父権制がぬけきっていないってことよね。</p> <p>「奥様でいらっしゃいますか？」と、セールスの電話。そんなとき、こう応えることにしている。「うちには奥様というものはおりませんが...どちらにおかけでしょうか？」「ご主人」の場合も同じ。小さな抵抗、でも大きな変革よね。(M)</p>	<p>「タリタ・クム」について</p> <p>「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために充分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。</p>
<p>正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3～4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。</p> <p>ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせ、また紙面についてのご意見は、 下記にお願いいたします。</p> <p>大岡左代子 073-422-0055 Fax 073-436-3333</p>	